

も、すでに末期。主治医にも「手の施しようがない」と言われる状態だった。「それから亡くなるまでの10年間は、つねに主人の『死』を覚悟しながら過ごす毎日でしたね」。



やっとつかんだ夢だからと痛みに耐えて仕事を続ける夫。時には弱気になり、「二人で放浪の旅に出て、最後はスペインの海へ飛び込もうか」と誘われたこともある。「自分が死んだら後から追ってこい」とも。「それもいいかなあ、と思っていた

んですよ。本当に私には、主人しかいなかったんですもの。でも、人間ってダメなものですね」

52歳で夫を見送り、写真も遺品もすべて処分して、さあ、これで後を追う準備ができたと思えた頃、実妹が急死。彼女の興した事業を立て直す仕事も、すでに末期。主治医にも「手の施しようがない」と言われる状態だった。「それから亡くなるまでの10年間は、つねに主人の『死』を覚悟しながら過ごす毎日でしたね」。

思い出のつまった家を相続の問題で手放さなければならなくなり、女ひとり、これからどうしようと考えていた。そこへまるで天啓のように飛び込んできたのが、コレクティブハウスのニュースだったのだ。「生まれて初めてパソコンの検索と

いうものを使って(笑)、夢中で情報を調べました。そこでニュースで見たのと同種のプロジェクトが進行中と知り、人居希望者を対象としたワークショップに参加するうちに、これまでにない充実した思いが胸に広がるのを感じたそう。

「共有のリビングで使うテーブルの大きさを話し合ったり、ショールームへ出かけてカーテンを選んだり。そんな日々の積み重ねが楽しくてたまらないんです。一緒に入居する予定の家族や子どもたちを見て、『ママやパパが忙しいとき、面倒をみるお手伝いができたら嬉しいなあ』とか。週何回か当番制で料理を作る『コモンミール』という食事があ

「共有のリビングで使うテーブルの大きさを話し合ったり、ショールームへ出かけてカーテンを選んだり。そんな日々の積み重ねが楽しくてたまらないんです。一緒に入居する予定の家族や子どもたちを見て、『ママやパパが忙しいとき、面倒をみるお手伝いができたら嬉しいなあ』とか。週何回か当番制で料理を作る『コモンミール』という食事があ

味噌汁を味わうのも今から楽しみ」

別れの哀しみ、ひとりの不安は誰にでもあるだろう。しかし人と人とのつながりを大切に思い、明日を少しでも今日より良い日にしたいと願う気持ち、未来へ歩き出す力をくれるように思う。ひとりだけど、ひとりじゃない。老いは決してゴールじゃない。彼女たち3人の人生に自分の「これから」を重ね合わせると、どこか身のぎゅっと引き締まる思いがしてくるのだった。撮影◎遠藤素子



りそう。

あえて選ぶ「にぎやかな毎日」

夫を亡くした悲しみを乗り越え、64歳にしてまったく新しい暮らしに飛び込もうとしている人がいる。「もう、引越しの荷物も詰め終わって、あとは入居を待つばかり!」。

た住戸に住みながら、他の世帯と共有のキッチンやリビングルームを持ち、住人同士が合理的にコミュニケーションを図れる住まい方だ。「昨年の秋、夕方のニュースでNPO法人が運営するコレクティブハウスが紹介されているのを見て『これだわ!』と思ったんです。子育て世代から単身のシニアまで、とにかくいろんな人が『一緒に暮らす』ことに、自分でもびっくりするくらい惹きつけられてしまいました」

昔の長屋のように雑多な生命感にあふれるにぎやかな暮らし。それは花田さんが夫と過ごした年月とは対極にあるものかもしれない。中学の同級生だった2人が結婚したのは26歳のとき。出版社を辞めてフリーの雑誌記者になった夫は、連載を何本も抱える売れっ子に。「それが30代半ばで急に『スペインへ留学して翻訳家になる』と。子どもがいませんし、主人の夢を支えるのは自分だけだと思って、私は日本で働いて仕送りを続けました」

いろんな人が「一緒に暮らす」ことに、自分でもびっくりするくらい惹きつけられて——花田さん

帰国した夫は専門的な知識を認められ、翻訳家として活躍を始める。そんな矢先、肝臓にがんが見つかる